

氏名	西村 有未
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第107号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	粘土的なマチエールのさらなる可能性に関する考察 物質のイメージ化と凝縮された物語表現のために
審査委員	主査 教授 赤松 玉女 准教授 深谷 訓子 教授 法貴 信也 准教授 伊藤 存 薄久保 香（画家）

論文の要旨

本論は、画家という制作者の立場より、実践を導く研究を主眼とした論文である。よって、自作品の達成に必要なマチエールの系譜が、ここでは扱われている。それが表題である「粘土的なマチエール」の系譜である。この系譜は、これまで一連の流れとして、積極的には語られてこなかった。その為、系譜の全体像を提示し、さらには内在する可能性を論じることが、本論の目的である。

「粘土的なマチエール」とは筆者により名付けられ、次のような意味を持つ。このマチエールの様相とは、具象的なイメージに沿いながら、一方で物質としての姿までも強く主張する。あくまで、両者の関係は拮抗しているのだ。つまりは、具象的なイメージと描かれた意味を危うくする物質性の高い描画材による、競合の結果として生まれた造形要素なのである。以上のことから、双方の領域に介入できる可変的態度と自律性を「粘土的」という言葉で、本論では比喩的に捉えている。また、続く「マチエール」は和製フランス語として、絵肌と同様の意味で用いる。

ではなぜ、上記の系譜を論じることが、今後の制作を導くことになるのか。これまで筆者は、突発的な出来事や理不尽な顛末が含まれた物語において、読み手として心に引っかかる一場面を描いてきた。そして、こうした作品では必ず、その物語における登場人物が画面の中心となる。本論では、彼女/彼らのある特性をヨーロッパ民間伝承文学の研究者である、マックス・リュティ氏の言葉で一部を捉え直しながらも「図形的登場人物」と呼んでいる。要約すれば「図形的登場人物」とは、昔話など特定の物語において全体の話の流れを優先するばかりに、個人としての描写や感情表現を劣後に置かれた、もしくは省かれた人々のことを意味する。自作品には、こうした「図形的登場人物」というイメージが誘引する、「物語を退行させ、ただの出来事や現象に引き戻す」表現を行う目的がある。何故なら「図形的登場人物」を生むテキストには、情報の欠落からくる足らなさや端的な表現による対面的な生々しさがあり、物語における一場面の再現描写というよりも、出来事や現象として

提出する態度が感受されるからだ。なお、本論の考察を通じて、「物語を退行させ、ただの出来事や現象に引き戻す」表現は逆説的に、内容が凝縮される過程で端折られ、断片化された、結果としての様相であると定めている。そして、以上のように誘引された表現の特性を副題の「凝縮された物語表現」という名で、最終的に包括している。さらに、そうした「凝縮された物語表現」を描くには、具象的なイメージを提示しながらも、物語の伝達が明晰になりすぎない絵画空間が必要とされることが判明した。これを実現するために、自作品の場合は、テキストによる具体的なイメージを抽象化していかなければならない。加えて、筆者は「図形的登場人物」が生まれる由縁となる、文字情報が不足している箇所に、抽象的な物質性を感受している。その為に、「抽象化」する行為には、物質性を強調した絵具などの描画材が必須となる。このような目的から、自作に必要な要素である「粘土的なマチエール」のあり方が見出された。

なお、絵画史における系譜「粘土的なマチエール」の立脚点には、筆者によるフォートリエの『人質』シリーズへの鑑賞経験が大きく関係している。であるからして、『人質』シリーズに端緒を見出し、まずは西洋絵画史を紐解くことで本系譜は確立された。しかし、「粘土的なマチエール」は歴史のなかに、最初から表立って存在しているわけではなかった。具象的イメージの伝達のためには、媒体である油絵具そのものの物質感は透明化するのが望ましいとされたこともあり、線や色彩よりも、マチエールに対する造形要素としての着目が遅れるからだ。実際、結論を先取りするならば、筆者が「粘土的なマチエール」と名付ける在り方は、戦後に自意識を持って現れる。しかしそれ以前から、その前駆形態と呼べるマチエールは存在する。そのため、この前駆形態まで遡り、「粘土的なマチエール」が表出するまでの一連の流れが、本論では2章に渡って中心的に論じられている。

全体の構成は、3つの章からなる。第1章では、「粘土的なマチエール」の前駆形態を検討した。ここでは、そもそも具象的なイメージにおける厚塗りがいかにして始まり、第二次世界大戦前まで表現として拡張されてきたのか、その過程が提示された。加えて、本章ではその造形性と構造を「イメージの物質化」と定義している。そこでは、再現表象的空間を基盤とする中で、イメージの面を絵具が後追いし、線的な集積によって物質性が強調されることで、マチエールが示されるからだ。具体的には、初めに「粗い仕上げ」による物語画を着床させ、本系譜の土壌を作ったティツィアーノ・ヴェチェッリオを中心としたヴェネツィア派の特性を作例から確認する。そして、前駆形態として確立されたレンブラント・ファン・レインの先行作例群の中に、粘土的なマチエールの萌芽が見られることを指摘し、ファン・ゴッホとジョルジュ・ルオーが描いた、平面的かつ記号的な空間における「イメージの物質化」を戦後の「粘土的なマチエール」への転換点として論述する。

第2章では、第二次世界大戦後に表出した「粘土的なマチエール」そのものを検討する。ここでは、その自意識の現れとして「物質のイメージ化」という特質が定義された。前駆形態とは逆転の現象が起き、物質性の強調された描画材が画面を先導し、その面上にイメージを導く操作が行われる為だ。つまり、「粘土的なマチエール」には、イメージが誘導した事後的な物質性ではなく、物質性がより先行して見える事前的な様相がある。さらに考察を深めるなかで、ここには対象の提示をある程度危うくする事で、異なる見え方や相反する意味を付加するイメージへの不具合と、遊戯性が特質としてあることが判明したのである。具体的な先行作例としては、まず戦後のジャン・フォートリエとジャン・デュビュッフエの作例を通じて、「粘土的なマチエール」の基本的な性格を定めた。次に、1950~60年代のフランク・アウアーバッハとレオン・コソフの作例における、再現的空間

に対する本系譜の変化と「物質のイメージ化」の異なる表現態度を指摘し、最後には 2000 年代のマティアス・ヴァイシャーの作例を中心的に扱っている。彼の作例では、自覚的な造形要素として日の浅い「粘土的なマチエール」が色彩とともに、同じくヴェネツィア派という出自をもつ造形要素という意味で、より自律性を獲得した状態で再会している。ここではフィレンツェ派を出自にみる、物語の展開する明晰な空間とは異なるアプローチで、再現的な空間へ今一度、主体的に関わろうとしていることが確認された。それ故に、マチエール自身の視点を主眼とした、具象性や物語性を示す絵画空間が大きく開かれたことが、結論付けられている。また、1 章から 2 章にわたって、本系譜を通じて凝縮された物語画表現が可能となっていく、その過程も示されている。

ここまでの 2 章が、粘土的なマチエールの系譜を扱う範囲となる。最後の第 3 章では自作品をモデルケースとして、画家が副題である「凝縮された物語表現」の契機をいかに発見し、油彩による制作までに至るのか、その内実を記述している。また、「図形的登場人物」について、その前提となるリュティ氏の考えを確認し、筆者の理解と付加された条件によって、意味を再定義している。

以上のような各章の論考を経た、最終的な結論を述べたい。「粘土的なマチエール」の特性は「凝縮された物語表現」と極めて有効に結びつき得る、という結論に至った。加えて、粘土的なマチエールから前史までを辿り直し、この系譜の特性を理解するなかで、戦後に自意識をもって扱われ出した造形表現として、そこには未開拓な可能性が残されていることも結論付けられた。このマチエールへ通常的な物語画に見られなかった、独自の物語る力を見出した為である。本系譜の前駆形態は「イメージの物質化」という、イメージを追うことで次第に物質が肉付くような、受肉されていく様相が制作過程にある。それは、あくまで旧来の再現的な態度に基づくものだ。だが、粘土的なマチエールには、物質のイメージ化という先に物質があり、そこへイメージが「吹き付けられる」様相が主にある。これは、絵画の奥へと引き寄せることで、異なる世界へ私たちの目を移送するものではない。ここには、物語をよりよく読むための開かれた「窓」とは、また異なる物語空間を醸す態度があるのだ。こうした態度には、自作の目的を達成した上で、伝統的な形式や蓄積され続けた歴史ゆえの具象画および物語画における、継承と展開の困難さを打開する鍵があると、本論は主張したい。

審査結果の要旨

西村有未氏は本審査において、博士論文「粘土的なマチエールのさらなる可能性に関する考察：物質のイメージ化と凝縮された物語表現のために」と並行して制作された、絵画作品計14点の展示を行いました。展示の内容は、油彩作品の「グリム童話（上）」シリーズから2点、「泣くの練習（6つの涙）」シリーズから2点、「赤いろうそくと人魚」シリーズ5点、そしてドローイング「人魚の母親」シリーズ5点です。

西村氏は、ジャン・フォートリエの絵画作品「人質」の鑑賞体験から、絵画のマチエールの可能性を見つけ出し、鑑賞者の感情を呼び起こすきっかけとしての絵画のあり方を探ってきました。作品の中で展開する、イメージや物語とマチエールの関係を考えるために、論文の第一章、第二章で、具体的なイメージを保ちつつマチエールを強く打ち出した作家たちの先行例を調査、分析しています。重要な構成要素「物質とイメージ」について、「イメージの物質化」「物質のイメージ化」という2つの道筋を交差させながら考え、実制作では具象的なイメージが「粘土的なマチエール」とともにせめぎ合うことで、特有の緊張感がある画面を生み出す研究を進めました。

そして第三章では、西村作品の重要なもう一つの柱である「物語」に焦点を当て、自作におけるマチエールと物語の関係を語っています。物語の中からモチーフを見つけ、ドローイング、絵画制作していく流れが詳細に語られ、図像や色の扱い、マチエールの選定など、制作のプロセスが臨場感を持って追体験できます。そして物語が先行する絵画ではなく、物語を「予感させる絵画」、「物語を後発させる絵画」の可能性を探っていくとしています。

制作のモチーフとして童話や昔話、神話を取り上げてきたのは、それらの物語は感情表現が最低限に抑えられ、読み手の理解を求めずに淡々と進み終わるような展開であること、ストーリーの経緯と結果の間の説明があるようでない、という特徴をあげておられます。そのような感情的な説明のない物語に登場するのが「図形的登場人物」であるとして、感情の受け皿となる抽象的存在として語られています。そして物語の意味や感情の欠落感を「粘土的なマチエール」を使って絵画に落とし込めないかと実践を試みます。

今回展示された「赤いろうそくと人魚」の解説によると、まず何度もテキストを読み、全体の雰囲気と部分的な言葉、すなわち色や登場人物の状態を表す言葉、オノマトペなど気になったディテールを抜き書きし、これを第一の観察と呼んでいます。そこからドローイングを複数作りますが、これらは、あえて油性・水性の画材をとり混ぜて、紙にしみこませたり、こすりつけたり、コラージュしたりしながら、色や形以外にも触覚的要素を取り入れたドローイングになっています。これらを客観的に眺め、西村氏の言葉によると「一つにまとまる共通の風味を理解すること」が第2の観察であるとしています。

その後油彩の制作に移行しますが、作者の態度として、物語の「本質的で独特な無時間性」を意識し「説明による物語の補足をしない」、むしろ「情報を創造し、造形感覚へ圧縮し、元のイメージへ還元すること」、あるいは、「図形的登場人物の中に色と質感、絵具の現象を与えることで情報を肉付けし直す」としています。そのために、西村氏は絵具や混入する材料を駆使し、画肌の豊かな表情を作ることに取り組んできました。また筆触についても、緩急を意識的に変えることで得られる効

果について検討されています。テストピースの繰り返しにより、その結果を得る手際がよくなり、色の組み合わせの独自性に加え、絵肌の組み合わせの妙味に富んだ画面になっています。

今回の展示作品のほとんどは、図形的登場人物の造形とマチエールの関係のあり方に焦点を当てるために、モチーフを顔のみに絞り込んだシンプルな構成になっています。2回目の発表の時に展示し、論文中でも詳しく解説された「The Five Chinese Brothers」のシリーズのように、物語の場面や背景を描きこむことは、それがすなわち「説明的に何かを付け足す」ということにはならないはずで、むしろ「物語を生み出すような絵画」の可能性を広げることができると考えられます。また第一章、第二章で詳しく調査し研究された物質のイメージ化をなしえた先行作家たちに比べると、西村氏はマチエールを作り込む丁寧さ、繊細さが個性と言えます。論文で方向性を明らかにした今、その独自性を生かしながら、構図や扱う材料、物質について実験的かつ冒険的に取り組むことで、さらなる作品の展開と深化が大いに期待できます。

以上のように、西村氏は制作に向き合う中で課題を見つけ、自らのこだわりを最大限に有効化しつつ、論文という言葉での整理をなす中で、絵画作品の新たな展開に結びつけてきました。これらを充実した論文と制作であると認め、審査教員全員一致で論文とともに展示された西村有未氏の作品を、博士号に値するものであると判断致しました。

以下にその他の審査員の意見を挙げます。

- ・筆者は物質的なマチエールを画面上に「足す」ことにより顕在化される部分の特筆しているが、その作業により「遮蔽」されている（されていく）、強い視覚的触覚性を保ちながらも、知覚の手が及ばない物事こそが、筆者のめざす、「語られなかった物語表現の本質」と感じた。

- ・作品サイズとそれに伴う筆者の身体的制作行為への影響および関連性などに、言及の余地が残されている。画面から直行する形で飛び出してくる絵具（の物質性）は、画面が大きくなると相対的に薄くなり、そのことで、同じマチエールでも役割や見え方が変わってくる。

- ・〈人魚の母親〉のシリーズでは、図形的イメージが想起させる物語性が乏しい為、語ろうとするマチエールの物質性との関係に若干のバランスの悪さを感じた。ただし、ここでは色、質感、現象による情報の肉付けを担っていたマチエールがさらに展開し、聞いた目の上のハイライト的描写を始めていることが見られ、次の展開の可能性が感じられた。